

## 『二十四詩品』の著者と成書年代に関する考察

——朝鮮本『詩家一指』と『木天禁語』に基づいて——

大山 潔

晩唐の司空図（八三七〜九〇八）は中国文学理論史上、その「韻味」説によって著名である。「韻味」説は彼の『與李生論詩書』を主とするいくつかの書簡、雜文等において「鹹酸の外」「韻外の致」「味外の旨」という表現によって表わされているが、この説を更に発展させたのが『二十四詩品』（以下『詩品』と略す）であるといわれてきた。明末清初以来、宋代の嚴羽及び彼の著書『滄浪詩話』がこの思想を受け継いだとする説が定着し、その後清の王士禎が司空図の『詩品』と嚴羽の『滄浪詩話』に基づいて神韻説を主張し、以後の文学思想に大きな影響を与えた。

しかし一九九四年、『詩品』の著者は司空図ではなく、明の懷悦であるという新説が提出され大きな波紋をよんだ。引き続いて、一九九五年、著者は懷悦ではなく元の虞集であるという説が提起され、この論争は現在に至るまで結論を見ていない。本論文はこの『二十四詩品』の著者と成書年代問題に関し、日本に保存された朝鮮本『詩家一指』と『木天禁語』に基づいて考察し、新しい説明を試みるものである。

一 これまでの研究経過と主な主張

一、一、経過

先ずこれまでの研究経過の概略を述べよう。

一九九四年十一月、浙江省新昌で開かれた唐代文学学会第七次年会と国際討論会において、復旦大学の陳尚君、汪涌豪は「司空図『二十四詩品』辨偽」を口頭発表、『詩品』の著者は明の懷悦であると主張する。論文は後に『中国古籍研究』一九九六年第一期に掲載された（以下「陳・汪論文」と略す）。

一九九五年三月一六日、文匯報は「『二十四詩品』作者是明代的懷悦」という記事を載せ、五月四日の人民日報海外版はこれを全文転載、この問題が広く知れ渡るようになる。

一九九五年九月、北京大学の張健は「『詩家一指』的產生時代与作者問題——兼論『二十四詩品』作者問題」という論文を発表。（『北京大学学報』社会科学版、第五期。以下「張論文」と略す）。その中で『詩品』の著者は虞集であると主張する。

一九九五年九月、南昌江西師範大学において中国古代文学理論国際學術研討会と第九次年会開催。『詩品』の著者問題、成書年代、『詩品』と『詩家一指』との関係の他、様々な角度から活発な議論が行なわれる。

一九九六年三月、汪泓「『司空図二十四詩品』真偽辨総述」が発表され（『復旦大学学報』社会科学版、第二期。以下「真偽論総述」と略す）、『詩品』の真偽に関する今回の論争が総合的に紹介された。これと併せて、汪涌豪単独による新たな論文「論『二十四詩品』与司空図詩論異趣」も同時に発表された（以下「汪第二論文」と略す）。この論文は司空図の世界観、詩学理論の特色、表現方法等について『詩品』と異なる点を論じたものである。

「真偽論総述」によれば、一九九五年九月南昌で開かれた中国古代文学理論国際學術研討会では、『詩品』の著者問題、成書年代問題以外にも、司空図の詩文に関する蘇軾の発言について、『詩品』と司空図の美学思想の比較、中国文学理論史における司空図の位置付けなど様々な角度から研究発表が行なわれたという。

その後一九九六年から一九九七年にかけて、祖保泉、陶礼天「『詩家一指』与『二十四詩品』作者問題」（『安徽師

『大学報』一九九六年二月第一期)、祖保泉『二十四詩品』是明人懷悅所作嗎? (同上、一九九七年二月第一期)、祖保泉「再論『二十四詩品』作者問題」(『江淮論壇』一九九七年第一期)(以下三つの論文をそれぞれ「祖論文一」、「三」と略す)、張柏青「從『二十四詩品』用韻看它的作者」(『安徽師大學報』一九九六年十一月第四期)等一連の論文が発表され、共に懷悅、虞集著者説を否定し、司空図著者説を主張する。

以上の研究経過のように司空図と『二十四詩品』に関する研究課題は次第に大きく広がってきたが、本論は朝鮮本『詩家一指』と『木天禁語』及びその周辺の文献に基づき、主として著者問題と成書年代について検討を加えたい。まず異なる三つの説を提起した陳汪論文、張論文、祖論文の関連部分を詳しく紹介する。

一、二、陳尚君、汪涌豪の考察及び懷悅説

陳・汪論文によれば、彼等が『詩品』の著者問題に疑問を持ったきっかけは十数年前、『詩品』については集大成の書といわれる郭紹虞編『詩品集解』を読んだことだった。この本に附された「序跋題記」の中で、最も古いものは明末鄭鄭と毛晋のものであり、宋元の書目には『詩品』の名が一切ないことを発見した。調査した結果、司空図が亡くなってから明の萬曆末まで七百年余り、この本が世に知られた痕跡も、典籍に引用された跡も、そして版本の来源に関する言及もなかったことが分かった。

彼らが明末許学夷の『詩源弁体』を読んだ際、『詩家一指』という作品に関する論述の中に『二十四品』という表題や、『詩品』の品目である「典雅」「綺麗」「洗鍊」「清奇」などの語があるのを偶然発見した。更に調査を進め、万曆五年(一五七七)朱紱『名家詩法彙編』巻二にある『詩家一指』を発見、その中の『二十四品』が『二十四詩品』とほぼ一致することが確認された。

朱紱本では『詩家一指』の著者は范德機とあるが、嘉靖二十四年(一五四五)黃省曾編『名家詩法』巻五の『詩家一指』には著者の名が記されていない。この問題について兩氏は、嘉靖十九年(一五四〇)高儒『百川書志』に記さ

れた『詩家一指』一卷、皇明嘉禾懷悅用和編集』、清初黃虞稷『千頃堂書目』及び『明史』『藝文志』に記された「懷悅『詩家一指』一卷」等に基づき、『詩家一指』は「外篇」の一部分が以前の人の論を引用したものであることを除き、懷悅（一四〇三—一四六四、兩氏の推定）が書いた作であると断定し、よって『詩品』の作者は懷悅であると結論を下した。

陳・汪論文によれば、『二十四品』と司空図とを結び付けた最初の書は明末清初の鄭鄮『峯陽草堂文集』『題詩品』、費經虞『雅倫』であり、司空図著『二十四詩品』となった最初の刊本は明刊本である呉永『續百川学海』、毛晋『津逮秘書』、宛委山堂刊一百二十卷『說郛』であるという。明末の人は『二十四品』に司空図思想との接近点を見出し、蘇軾が司空図について述べた言葉（注一参照）を論拠として、『二十四品』を司空図の著作としたが、両者の思想の間には明らかな違いがあるというのが兩氏の主張である。

#### 一—二、張健の虞集說

張論文は『詩家一指』の成書年代と著者の二点に集中して考察する。張氏は陳氏、汪氏が提起した疑問に理解をしたが、懷悅説には同意しなかった。彼は懷悅より半世紀も早い趙謙（一三五二—一三九六）の『学范』を挙げ、その中に既に『詩家一指』からの引用があることを取り上げ、『詩家一指』の成書年代は『学范』が刊行された洪武二十二年（一三八九）以前であり、従って懷悅が著者であることはありえないと指摘した。

更に張氏は懷悅と同時代の人、楊成編『詩法』（一四八〇）卷一『詩家一指』（以下楊成本と略す）及びその系列のもの（皆『詩家一指』を含む）を調べ、それらの中には懷悅と関わりのあるものが一つもないことを明らかにし、これ等を懷悅説を否定する根拠とした。

また陳・汪論文が懷悅説の根拠とした『詩家一指』一卷、皇明嘉禾懷悅用和編集』（高儒『百川書志』）、「懷悅『詩家一指』一卷」（黃虞稷『千頃堂書目』、『明史』『芸文志』）などの記述と、清阮元文選樓刻『天一閣書目』から発見

した懐悦『詩家一指』後序の抄録（注五参照）を分析することによって、懐悦は著者ではないばかりか、編集者でもなく、資金を提供した「出資者」に過ぎないと張氏は推測した。

また朱紱『名家詩法彙編』では范徳機が著者になっていることについて張氏は次のように説明する。朱紱本の底本である楊成本では「木天禁語」が「内編」、「詩家一指」が「外編」となっていて、前者の著者が范徳機である。朱紱はこの影響を受け、「内編」と「外編」を共に范徳機の作と考えたのであろうが、しかし他の版本がない限り、この説の根拠は十分ではないというのである。

一方、張氏は新たな資料——史潜校刊の『新編名賢詩法』を発見した。それについて彼の論旨を述べると以下の通りである。この書は楊成『詩法』に比べて年代が古く（張氏の推算は天順年間「一四五七—一四六四」或は成化「一四六五—一四八七」初期）構成も異なる。下巻には「虞侍書詩法」という表題の文章（以下「虞集本」と略す）がある。「虞侍書」とは虞集（一二七二—一三四八）のことで、彼は文学に優れ、元代四大家の一人と呼ばれた。虞集本の構成は序部（無表題）「三造」「十科」「四則」「二十四品」「道統」及び「詩遇」からなる。下線部分の内容は楊成『詩家一指』と重なるが（題目には異同あり）、虞集本と楊成本にはいくつかの異なる点がある。例えば『二十四品』の題注と品目注は著者以後の人が付けたものと考えられるが、虞集本にこれがない。特に虞集本「三造」の内容は楊成本の「三造」と違って、詩を論じた前人の語録ではなく、楊成本の序に相当するものである。よって、虞集本は楊成本のように改竄されたものではなく、体裁が一貫し、構成が整っていて、一人による著作であると張氏は推論している。

最後に張氏は「集之一指」という一句によって虞集説を裏付ける。「集之一指」とは虞集本の「道統」（楊成本の「普説外篇」に相当する）にある表現である。張氏の解釈は、「集」は虞集の自称であり「一指」は『詩家一指』であるというもので、『詩家一指』つまり『虞侍書詩法』の著者が虞集であると主張する。『虞侍書詩法』は一人によって

書かれた作品であるのでその中に含まれている『二十四品』、つまり『二十四詩品』の著者も虞集である可能性が大きいという結論を下したのである。

一四 祖保泉 陶礼天の司空図説

祖氏、陶氏は史潜本の『虞侍書詩法』に対して、書名に虞集の官職名「侍書」が使われていることから、これは虞集が死んだ後加えられたもので、『虞侍書詩法』は「偽托」の作（自分の文章を古人の著作に見せかけるもの）であると虞集説を否定する。懐悦説については『明史稿』『藝文志』『明史』『藝文志』の卷四文史類に「懐悦『詩家一指』一卷」という記述があり、祖・陶氏によればこのことは事実懐悦編集『詩家一指』が発見されたという。一方、趙謙『学范』には『詩家一指』が引用されていることから、元代、明代には二種類の『詩家一指』が流伝し、一つは「無名氏の元人本」で、一つは懐悦が刊行したものと推測して、懐悦著者説を否定する。また黄省曾編『名家詩法』巻五にある『詩家一指』を『虞侍書詩法』と校刊した結果、『名家詩法』の『詩家一指』は虞集本から三五〇〇字、他の十何種類の詩話から二五〇〇字を抄録した、誤植の多い「雑鈔」であるので以後重視されなかったが、『二十四品』の部分に限って善い底本を選んだため、毛晋『津逮秘書』にある司空図『二十四詩品』の前身となったと述べている。

最後に両氏は蘇軾が司空図作と述べている「二十四韻」が即ち『二十四詩品』であるとして司空図著者説を主張する。「二十四韻」の韻は「韻部」「韻脚」を意味し、「二十四韻」は韻を踏んだ二十四首のそろっている詩作であるはずである。また「二十四韻」を修飾する「詩之有得於文字之表者」という語からすれば、「二十四韻」は「味外の旨」を体得した組詩であるべきであって、それはほかならず『二十四詩品』であるというのである。

以上は著者懐悦説、虞集説、司空図説の概要である。

## 二 朝鮮本『詩家一指』と『木天禁語』

筆者はこの度幸運にも国立国会図書館で新たな資料——朝鮮本『詩家一指』と、同じく『二十四品』を含む朝鮮本『木天禁語』を発見した。この二書を検討した結果、『詩家一指』と懷悦との関係、『詩品』の著者と成書年代などについて陳・汪論文、張論文、祖論文とは異なる結論に達した。ここで先ず二書の構成を略述する。

### 二一、朝鮮本『詩家一指』<sup>(9)</sup> 合部 (国立国会図書館、鴨詩文一三九九)

本書は一冊一卷、木版、四周双辺、大黒口、二十九槿、線、本文は八行行十四字、中縫に「詩家一指」と葉数(六十二葉)が書かれていて、句読点が付いている。始めに成化二年(一四六六)魏驥の「詩家一指序」<sup>(3)</sup>と嘉靖辛亥年(一五五二)尹春年の序があり、終りに同じ成化二年懷悦の「書詩家一指後」<sup>(5)</sup>がある。魏驥と懷悦の序は六行行十二字、中縫にそれぞれ「詩家一指前序」「詩家一指後序」及び葉数(三葉と二葉)が書かれていて、尹春年の序は八行行十五字、中縫に葉数(五葉)のみである。「養安院藏書」と「鴨軒文庫」の印がある<sup>(6)</sup>。

本文の初めには「詩家一指 嘉禾懷悦用和編集」とある。この書き出しは張論文に挙げられている嘉靖十九年(一五四〇)高儒『百川書志』卷十八にある「詩家一指、一卷、皇明嘉禾懷悦用和編集」という記述と一致する。懷悦後序と校刊した結果、阮元『天一閣書目』に収録された懷悦後序は抄録したものと分かった。尹春年の序によるとこの刊本は明嘉靖辛亥年(一五五二)に朝鮮李朝の文臣尹春年によって刊行されたものである。

朝鮮本『詩家一指』の構成は楊成『詩法』及びその系統のものとは比べて大きな特徴を持っている。それは後者において「詩法卷之一 木天禁語<sup>(内篇)</sup>」「詩法卷之二 詩家一指<sup>(外篇)</sup>」「詩法卷之三 嚴滄浪先生詩法」のように独立していた部分分が、前者において全て『詩家一指』と言う書名の元に収められていることである。(「一覽表」参照) 以下楊成本『詩家一指』のように序部、「十科」、「四則」、「二十四品」等を中心内容としているものを狭義の『詩家一指』、朝鮮

本『詩家一指』のように狭義の『詩家一指』をほぼ完全に含み、更に『木天禁語』等いくつかの文章を加えて形成されているものを広義の『詩家一指』と呼ぶことにする。

ここで「祖論文二」に挙げられた懐悅編集『詩家一指』（以下「祖論文懐悦本」と略す）に言及する必要がある。「祖論文二」によればこの版本は一九九六年六月北京大学の張健博士（虞集説を主張する張健ではないかと推測されるが、祖氏の文章からは確定できない）から寄せられたもので、合計三二葉、六行行一二字、中縫には「前序」「後序」を除いて無字、無魚尾、「前序」と「後序」とは成化二年魏驥の「詩家一指序」と懐悅の「書詩家一指後」であり、本文一葉目の第一行上部に「詩家一指」、第二行の下部に「嘉禾懐悅用和編集」と書かれていて、本文は約六千字、楷書であるという。

この版本についての祖氏の紹介は以上であるが、朝鮮本『詩家一指』と比較すればいくつかの疑問が生じる。先ず本文の字数である。「祖論文二」に挙げられた数字より計算すれば、全書は四千六百字である筈だが、「祖論文二」には「本文約六千字」となっている。正しいのはいずれの数字だろうか。朝鮮本『詩家一指』の本文は一万四千字弱、狭義の「詩家一指」「木天禁語」「嚴滄浪先生詩法」の部分はそれぞれ六千七百字（三十葉）、五千五百字弱（二十四葉半）、一千七百字弱（七葉半）である。字数から見れば「祖論文懐悦本」は広義のものではないと推測できる。では果たして本当の懐悦本は狭義のものであろうか、それとも広義のものであろうか。懐悅の後序には「雙拋、單拋、内剝、外剝、鉤銷連環、一字貫穿」についての論評があるが、そのいずれも狭義の『木天禁語』の内容である。また順治乙年（一六五五）費経虞『雅倫』『合論』（卷十三の十二葉）に、『詩家一指』の名のもとに狭義の『木天禁語』の「氣象」条が引用されている。これ等の引用事例からも本来の懐悅編集『詩家一指』は広義のものと考えられることができるのではないだろうか。

二二一、朝鮮本『木天禁語』

詩家指要 杜陵詩律 附詩法源流

（国立国会図書館、鶉三四三五）



本書は一冊、四卷、銅活字、四周双辺、大黒口、十二行行二十字、二十八纏、線、中縫にそれぞれ「木天禁語序」「木天禁語」「木天禁語詩家指要」「木天禁語杜陵詩律」「詩法源流」及び葉数が書かれている。本文の葉数と字数がそれぞれ二十葉の九千六百字、十葉の四千八百字、十一葉の五千三百字弱で、合わせて四十一葉の二万字弱で、附が十五葉七千二百字である。「養安院藏書」の印がある。この書も尹春年によって刊行されたが、嘉靖乙卯（一五五五年）の跋の中で彼は「曾て趙謙の『学范』の中に『木天禁語』という項目があるのを見たことがあるが、玉堂（翰林院）で奉仕をする事になった際、燕京でこれを購入した。∴『詩法源流』も詩を学ぶための要法なので、附して一緒に印刷した。」と述べている。この記述によれば、朝鮮本『木天禁語』の底本になるものが一五五五年以前に出版されたものであり、『詩法源流』が原書とは別のものであることが分かる。朝鮮本『詩家一指』とは違って、底本の編集者等はない。

朝鮮本『木天禁語』の構成は初めから順に『木天禁語内篇』『詩家指要』『杜陵詩律五十一格』の三部から構成され、最後に『詩法源流』が附されている。（「一覽表」参照）

『木天禁語内篇』は先ず朝鮮本『詩家一指』、楊成『詩法』、史潜『新編名賢詩法』等に共に含まれている范徳機の序、と『篇法』、句法、字法、気象、家数、音節』を中心として展開された部分である。筆者はこれを狭義の『木天禁語』と呼ぶ。

第二の部分『詩家指要』は『二十四品』を含み、楊成『詩法』及び朝鮮本『詩家一指』の狭義の『詩家一指』部分とほぼ同じ構成で、表題が『詩家指要』になっていることと、「外篇」「三造」部分を含まないことが特徴である。

以上の内容のように『木天禁語』にも狭義のものと広義のものがあると分かる。

## 三 懷悅著者説の否定

## 三一 『学范』の『一指』問題を解く

張健は『詩家一指』の成書年代を検討する際、趙謙の『学范』に『一指』が典故として書かれていることを発見し、よってその成書年代は洪武二十二年（一三八九）以前と推定し、懷悅著者説を否定した。『学范』の初版は洪武二十二年（一三八九）と推定されるが、張氏はこの版本を見ることができなかったようである。彼が永樂二年（一四〇四）王惠刻本、明刻本、清初刻本という三つの版本に基づいて校刊した結果、「一指」という語が小文字で三ヶ所に書かれていることは相違はなかったという。筆者が崇禎二年（一六二九）本、明曆二年（一六五六）刊、明末刊本などを校刊した結果もそれと同じである。その三ヶ所とは次のようである。（番号は筆者が付けたものである。）

一、作詩先命意、如構宮室、必法度形似、備於胸中、始施斤鉞、此以實論。取譬、則風之於空、春之於世、暫有迹而無能得之所為者。是以造端超詣、變用易成、立意卑凡、真情愈遠。一指（作范・命意）

二、有以字論者、有以意論者、有以事論者、有以血脉論者。一指（作范・篇法）

三、氣象 翰苑 輦轂 山林 出世儒先石屏之類 江湖 閭閻 未学道听途說又江湖閭閻之下

已上氣象各隨人之資稟高下而發之、又学以變化氣質須仗師友。及所讀所習以開導佐助、然後能脱去近俗、以造高

明。已上並一指（作范・氣象）

以上のように三つの文章の最後に共に「一指」が見られる。張氏は一番の例だけを用いて、「この文章は『詩家一指』の『十科』の第一科「意」である。よってこの「一指」は即ち『詩家一指』のことを指し、『一指』は遅くも洪武二十二年（一三八九）<sup>11</sup>以前に既に存在したと断定できる」と述べている。残りの二箇所については注の形で『学范』に「一指」からの引用はなお二ヶ所あるが、『詩家一指』には見られず、『木天禁語』と『詩法家数』に見ら

れる。<sup>13</sup>これは「一指」が流伝される間に上の二書と錯綜したことを示している。紙数に限りがあるため本論文ではこれ以上議論しない。別の機会に詳しく述べたい<sup>14</sup>と述べている。

しかし、この残りの二ヶ所の問題が解決されなければ、『学范』に書かれた「一指」が『詩家一指』と同じ書物であるとは断定できないのではなからうか。この意味で張論文の段階では、『詩家一指』が趙謙『学范』の時代に既に存在したという立証はまだ不完全なものであるといえよう。楊成本『詩家一指』に従う限り、この問題は解決できない。しかし、朝鮮本『詩家一指』と校刊した結果、上の引用一番が「十科」の「意」(狭義の『詩家一指』)から、二番三番が「六閔」「家数」(狭義の『木天禁語』)からの引用であることが分かった。(一覽表を参照)。又「一指」と「已上并一指」が使い分けられている理由も明らかになってきた。「一指」とだけ記されている一番と二番は『学范』の中で直接繋がっているが、「已上並一指」が書かれている三番と二番との間は十三葉も隔てている。その十三葉の中で「王氏曰」「曾氏曰」「對床夜語曰」のように出典が明記されたものが三ヶ所あり、それ以外は出典が示されていない。この部分を朝鮮本『詩家一指』と照らし合せて見た結果、八条を除いてすべて見い出すことができ、その数は三十五条にも上る。このために趙謙は「已上並一指」という語を用いて、ここまでの全てを併せて「一指」からの引用であると示したのではないかと推察される。以上の結果によって、『学范』に引用された「一指」は狭義の『詩家一指』と『木天禁語』を共に含むことが明らかにされた。『学范』のいう「一指」とは『木天禁語』を含む広義のものであり、すなわち朝鮮本『詩家一指』と同じ系統のものと言ってよいだろう。よって朝鮮本『詩家一指』のような広義のものが趙謙の時代——十四世紀末に既に存在したことは明らかであり、その結果懐悦が『詩家一指』の著者であることは完全に否定されるのである。

### 三十一、懐悦編者説と狭義の『詩家一指』の安定性

『百川書志』十八巻では高儒が「杜陵詩律」一巻、楊仲宏、「詩林要語」一巻、范徳機、「詩法源流」一巻、元

人著」、「詩家一指」一巻、皇明嘉禾懷悅用和編集」、「詩家指要」一巻、「木天禁語」一巻」を列挙した後、「以上六種俱相出入、當削其重複、定成一集、以便觀覽、不然則紛無定格矣。(上記六種の書はお互いに錯綜している。読易すくするためには、其の重複する部分を削り、一冊にまとめるべきである。)」と指摘する。今回発見した朝鮮本『詩家一指』と『木天禁語』を通して、我々はこれらの書物がお互いに重複するばかりでなく、同じ書名を用いながら広義のものと狭義のものが存在することを知った。以下これら重複する書物を「一指木天群」と呼ぶが、史潜『新編名賢詩法』と楊成『詩法』及びその系列の書物もこれに属すと思われる。

この錯綜した状況について『学范』の「一指」と懷悦編集『詩家一指』との関係を見てみたい。先ず書名問題である。これまでの関係する論文はいずれも「一指」を『詩家一指』と解している。しかし、朝鮮本『詩家一指』の懷悦「書詩家一指後」には「一旦偶獲是編」があり、魏驥「詩家一指序」には「一日嘉禾懷悦氏用和；以書抵余、自言近得詩法一編；擇其精粹、訂為詩格、名之曰詩家一指」とある。これ等によれば懷悦は「ある日偶然手に入れた書物」から精粹を選び以て改訂して詩論書とし、これに『詩家一指』という名を付けた。つまり『詩家一指』という書名は懷悦によって初めて作られた可能性があるのではないか。なによりも『学范』の「一指」と懷悦編集『詩家一指』とは違う時代に形成されたものである。『学范』以前に『詩家一指』という名の版本が見付からない限り、『学范』の「一指」を即『詩家一指』と書き直すことには慎重になるべきではないか。

次は懷悦の役割について考えてみたい。張健は『天一閣書目』にある懷悦『詩家一指』序の抄録(注五参照)に基づき、懷悦はただの「出資者」に過ぎないと結論を下した。しかし、上に引いた魏驥の序文からすれば、懷悦が入手したものに對して再編集を加えたことになる。また懷悦は成化元年(一四六五)『詩法源流』という書を編集している。朝鮮本『詩家一指』と『詩法源流』の構成を詳しく見れば、懷悦がこの二冊の書によって「一指木天群」に含まれる様々な詩論の核心部分を包摂しようとする意図のあったことが伺える。この点からも懷悦は単なる出資者ではな

く、積極的な編集者であったと考えたいのである。

最後に『学范』に引かれた『一指』と『二十四品』との関係について述べたい。『一指』が十四世紀末に既に存在したことは明らかにされたが、これによって直ちに『二十四品』もその頃に存在したとは断言し難い。なぜならば『一指』には『二十四品』が含まれているという直接の根拠は未だ見付かっていないからである。ここで筆者は狭義の『詩家一指』の安定性に基づいてこの問題を考えてみたい。「一指木天群」にある様々な版本に狭義の『詩家一指』が含まれており、版本毎に多くの異同が存在するが、「十科」、「四則」、「二十四品」の部分が必ず含まれていることほどの版本も例外ではない。『学范』の引用する『一指』には「十科」の中の「意」にあたる文章が見えており、この「一指」も狭義の安定した『詩家一指』を含んでいると推測される。とすれば、『二十四品』も『学范』の時代ですでに存在したことになり、懐悦著者説が否定されるのである。

#### 四 狭義の『詩家一指』は「古人」や「宗匠名家」の詩論を集めたもの

以上趙謙『学范』を用いて、『二十四品』を含む広義の『一指』の成書年代を遅くも十四世紀末と確定することができた。更に、『詩家一指』や『木天禁語』自身の中にもその年代を示すものがないかを検討してみたい。

##### 四一、 出典と年代が示されたもの

狭義の『詩家一指』の中で出典或は年代が明示されているものは非常に少ないが、詳細に読めば以下のことが分かる。(引用は朝鮮本『詩家一指』に基づく)

「四則」の「法」(史潜本では「格」につくる)には「漢晋高古、盛唐風流、西崑稜冶、晚唐華藻、宋代乖鍤洎江西諸家造立不等、氣象差殊」(楊成本と朝鮮本『木天禁語』では「宋氏」につくる)という表現があることから、元以後に書かれたものがあると思われる。

「詩代」（楊成本、史潛本無）には「虞廷、商洛表、三百篇、離騷、漢、西晉、六代、盛唐、晚唐、宋」のように宋が最後になっていることから、宋以後に書かれたものがあると考えることができる。

「當代名公雅論」（史潛本無、楊成本では「名公雅論」として卷三「嚴滄浪先生詩法」にある）は主として元代四大家と称せられる范德機、虞集、揭傒斯、楊仲弘達の詩に関する論述を収録しているが、「當代」は元代を意味すると考えられる。よつてこの部分は元人が書いたものと推測できる。

「外篇」の第二段（史潛本、朝鮮本『木天禁語』無）の始に「晦庵論詩、所謂讀詩須沈潛風詠、玩味義理……」とあるが、これは朱熹からの引用であることが分かる。

「三造」（史潛本、朝鮮本『木天禁語』無）最後の「風雅既亡……」の注によれば、宋の項安世『項氏家説』からの引用である。

この他筆者が南宋嚴羽『滄浪詩話』、費絳虞『雅倫』（一六五五年）、胡震亨『唐音癸籤』（一七一八年）に基づいて調べた結果、「三造」には『滄浪詩話』からの引用が八条の他、宋魏慶之『詩人玉屑』、梅堯臣（一〇〇二〜一〇六〇）、王安石（一〇二一〜一〇八六）等からの引用もあることが明らかになった。

以上の結果をまとめて言えば、狭義の『詩家一指』には、少くとも宋、元のものが含まれているということができ

#### 四十二、「古人意格聲律」「宗匠名家之道」の意味するところ

狭義の『詩家一指』の最初の部分は朝鮮本『詩家一指』、朝鮮本『木天禁語』所収『詩家指要』、楊成本卷二『詩家一指』及び虞集本とも皆次のように始まる。（引用は朝鮮本『詩家一指』に基づき、（一）内は朝鮮本『木天禁語』との相違であり、↓の無い場合は文字の増減を意味し、訳は後者に従う場合もある。旁線とローマ字は筆者が付けたものである。）

a 乾坤清氣、性情之流出也。有氣則有物、有事斯有理。必先養其浩然、存其真宰、彌綸六合、圓攝太虛、觸處成真、而道生於詩矣。詩猶禪宗（↓家）、具摩醯眼、一視、而萬境歸元、一舉、而群迷蕩跡。超元（↓言）象之表、得造化之先。夫如是、始有觀詩分。b 觀詩、要知身命落處與夫人情變化。意境周流、巨天地以無窮、妙古今而獨往者、（↓則）未有不得其妙之（妙之）無し）所以然也（也）無し）。由之可以明十科、達四則、詠（↓該）二十四品。觀之不已、而至於道。c 夫求於古者、必泥於今。求於今者、必失於古。蓋古之時、古之人、而其詩如之（↓是）。故學者欲疏鑿情塵、淘汰氣質、遣其迷妄、（而）返其清真、未有不如是而得其（所以）為詩者。學下手處、先須明徹古人意格聲律、具（↓甚）於神境事物、邂逅鬱折（↓抑）、得其全理於胸中、隨（↓隨）寓唱出、自然超絕。若夫刻意造創（↓創造）、終虧天成。苟且經營、必墮凡陋。妙在著述之多、与涵養之深爾。然當求正於宗匠名家之道、庶幾可以橫絕旁流者也。

a 乾坤の清氣は性情の流出するところである。気があればすなわち物があり、事があればそこには理がある。必ず先ず浩然（の氣）を養い、真宰——天地を主宰するものを所有し、宇宙全体を覆い、太虚をそのままに所有する。そうすれば至るところで悟りが開け、詩において道が生ずる。詩（の世界）にも禪宗のように摩醯眼——優れた鑑識眼がある。（これをもつていれば）一眼視た瞬間に萬境が元に帰し、（指を）挙げた瞬間にすべての迷いが消える。言語や象の表面を超え、造化の根源を得る。このようにして初めて詩を観る資格が備わるのである。b 詩を観るには、運命の帰するところと人情の変化を知らなければならぬ。意境は流動して、天地を巡って極まりなく、古今の奥義を知り尽くして独り往く者は、その所以を会得していないものはいない。それゆえ古人の詩を見ることによつて十科を理解し、四則に達し、二十四品を備えることができる。こうしてたゆみなく詩を観れば道に至るのである。c 古のみ求めるものは必ず今において束縛され、今のみを求めるものは必ず古を見失う。古の時代、古の人だからこそそのような詩ができたのである。故に学ぶ者は情欲を取り除き、氣質を淘汰し、迷妄を捨て、清真に返る。こう

しなければ詩を為す所以を得られないのである。着手するところを学ぶには先ず古人の作つた意境、格調、リズム、韻律を完全に理解し、自然のものと心を遊ばせることや、思いかけない運命に憂悶する様をわがものとす。その理のすべてを胸中に収め、ありのままに唱い出せば、自ずから超絶する。もしも苦心して創造するならば結局自然を失う。無理をして造れば、必ず平凡卑俗に陥る。肝心なのは著述の多さと涵養の深さであるのだから、巨匠名家が示した道に正しい詩作の作り方を求めるべきである。このようにすれば時流を超越し世に広く知られることができるのである。

これが「摠論」の内容であるが、この「摠論」と「十科」、「四則」、「二十四品」との関係述べる前にこの三種の文章の内容を簡単に紹介する。「十科」は「意、趣、神、情、氣、理、力、境、物、事」という十種の要素が詩においてどのように働いているのか、どのようにすれば獲得できるのかを語る十条の文章である。「四則」は「句、字、法、格」の詩における在り方、効用などを述べるもので、「十科」が詩の境地、情性など内的なものを論ずるものに対し、詩の技法を語るものである。「二十四品」は十二句の四言詩をもって二十四種の詩の風格を表現し、それらを獲得する方法や、風格の根源などを詩的に語るものである。

「摠論」の中で「十科」、「四則」、「二十四品」が同時に言及されたので、これは少なくとも三者に関する総論と見ることができよう。その要旨を整理すれば、a、大事なものは詩人が氣を養い、天地を主宰するものを内存すること。そうすれば造化の根源を得て、「一視」「一挙」するのみで全ての迷いを断つことができる。b、こうして観賞眼を備えた後、古人の詩を見ることで、「十科」を理解し、「四則」に到達しそして、「二十四品」を完備することができる。c、学ぶ際最も重要なものは内的修養であり、詩作に着手するときは「古人の意格聲律」をよく理解し、「宗匠名家の道」を求めねばならないということであろう。

この文脈によって、「十科」、「四則」、「二十四品」の位置付けを考えれば、これらは詩を学ぶ際の出発点とすべき



「古人の意格聲律」や「宗匠名家の道」が明確に示されたものであると読み取れる。そうなると次の二つの推測が可能である。一つは、この摠論の作者は「十科」、「四則」、「二十四品」の作者とは同一人物ではなく、「十科」、「四則」、「二十四品」を一つにまとめた編集者であるということである。もう一つは、「十科」、「四則」、「二十四品」は編集者にとって「古人」の作った「意格聲律」であり、また「宗匠名家」が示した道であるということである。この二つの推測は二つの結論に結び付けられる。一つは、狭義の『詩家一指』は一人の作品ではなく複数の人の文章を集めた詩論集ではないかということであり、張健の「一人による著作」という説とは異なる結論に達する。もう一つは、「十科」、「四則」、「二十四品」の著作年代はこれらを編集した「摠論」の著者年代元代と比べると、より早く、より古いのではないかということである。

## 五 虞集著者説に対する疑問

一―で紹介したように、張健は『新編名賢詩法』にある虞集本つまり『虞侍書詩法』を発見し、これを一人の著者の書と見做し、「集之一指」の「集」を「虞集」に、「一指」を『詩家一指』として解釈することによって、『虞侍書詩法』に収められている『二十四品』の著者は虞集であるという説を提唱した。

しかし、「集之一指」の「一指」を書名として解釈する前に、「一視」「一挙」（虞集本の「三造」の中の「一観」にもある）は禅宗思想に基づいて述べられていることを考へる必要があると思う。

### 五― 「一視」「一挙」の意味

ここで「一視」「一挙」に直接に関連する部分だけをもう一度見ることにしよう。

…詩猶禅宗、具摩醯眼、一視、而萬境帰元、一挙、而群迷蕩跡。超元象之表、得造化之先。夫如是、始有観詩分。

『慧苑音義・上』には「摩醯首羅、正云摩醯湿伐羅、言摩醯者、此云大也、湿伐羅者、自在也、謂、此天王於大千世界自得自在故也。」という文章がある。『佛教語大辞典』（中村元、東京書籍株式会社昭和五年二月一日発行）に依れば、「摩醯」は「摩訶」と「摩醯首羅」の二意があり、前者は「大きな、偉大な、の意。」後者は「大自在天。宇宙の大主宰神。」と解釈している。この説に従って「摩醯眼」を考えれば、「摩醯眼」とは最も優れた鑑識眼と理解できる。次は「一拳」であるが、言葉通りに訳せば「一度挙げる」との意味である。しかしこれも「摩醯眼」と同様禅宗思想を背景とすることを考えれば、注目されるのは「一指禅」という語があることである。『景德傳燈録・俱胝傳』には釋天龍が一本の指を豎にしたことによって、俱胝を悟らせ佛の道の奥義を伝えたと言う故事がある。「一指」によってこの典故を表わすことが一般的であるが、「摩醯眼」「一視」との対応関係及び「一拳、而群迷蕩跡」という文脈に基づいて、筆者は「一拳」が「一指」と同じ意味合いで使われているのではないかと考える。このような意味で「集之一指」の「一指」を解釈するとどうなるだろうか。

#### 五一一 「一指」——禅宗の「一指」

「集之一指」に関する文章は朝鮮本『詩家一指』「外篇四段」、楊成本卷二『詩家一指』「普説外篇四段」、そして虞集本の「道統」にある。全文はかなりの長文なので、抜粋して掲げる。（朝鮮本『詩家一指』に基づき、（ ）内は虞集本との相違を示し、↓がない時に文字の増減を意味する。）

世皆知詩之為、而莫知其所以為。知所以者情性、而莫知其（「其」無し）所以情性、夫如是而詩道（「道」無し）遠矣。：性之於心為空、空與性等、空非離性而有、亦不離空而性、必非空非性、而性固存矣。：惟憫然万物之外、雲翠（之深）茂林青山、掃石酌水、蕩滌神宇、獨還（↓適）冲真、猶春華胚胎、假之時雨（↓雨時）、夫復不有一日性悟之分耶。集之一指、所以返學者之迷途（↓集之一指、詩也）、三造、所以發學者之関鑰、十科、所以別武庫之名件、四則、条達規鍵（↓律）、指其（↓述）踐履、二十四品、所以（「所以」無し）含攝大道、如載圖經。於詩未必盡似、

似（↓品）亦（亦）無し）不必有似、而或者為詩之尤。抑真人而後知詩之真、知詩之真、而後知一指之非真、然（然）無し）非真之真、備於（↓其）一指矣。

世間は皆詩を書くことを知っているが、詩を書く所以を知らず、その所以が情性であることを知っても、その情性の所以を知らない。これでは詩の道は遙かに遠い。：性は心において空である。空と性とは等しく、空は性から離れて存在せず、また性は空から離れて性として存在しない。非空であり非性であつてこそ、性がしっかりと存在するのである。：万物の外で自在自足し、緑茂る山中で、石を掃き、水を酌み、精神を清め、淡泊純粹な本性に戻る。こうすれば、正に春花の芽生えが恵みの雨に力を与えられるが如く、性と悟りが二度と分離することがない。集の一指をもつて学ぶ者を迷いの道から正道にもどさせ、（↓集の一指は詩であり）三造をもつて学ぶ者に詩の要諦を教え、十科をもつて詩において武器となるものの区別を教え、四則は条理備つた規律であつて、実作を導き、二十四品は詩の制作の様々な道を全て包摂して、地図を見るように明らかである。詩は悉く似る必要はなく、似ているようでも必ずしも似てはいないが、それでもあるものは優れた作品となる。真人——超越して悟つた人のみ詩の真を知り、詩の真を知つてから一指の非真を知る。しかし、非真の真は一指に備わっているのである。

ここではかなりの字数を費やし「情性」の「非空非性」という境地及びそこに到達する方法が語られている。そしてついに「性と悟とは二度と分離しない」という境地に達すると述べた直後に「集の一指」の論が出てくる。しかし、その表現においては虞集本とそれ以外の版本とは大きな違いがある。前者の場合は「集の一指、詩也」となっている。つまり「集の一指」は詩であるという。もし「一指」が虞集本を指すとすれば、それは詩法、詩評ではあるが、詩そのものではないことは一目瞭然である。また、性と悟とは分離しないという論が終わつた直後に「集の一指、詩也」が出てくるのは文脈的にも繋がらない。よつて、虞集本の「集の一指、詩也」は誤植と判断したい。一方朝鮮本『詩家一指』及び他の版本には「集の一指、所以返学者之迷途」とある。これは「集の一指」をもつて学者を

間違つた道から帰させると読むことができるだけでなく、文脈的にも一貫している。これらのテキストに従えば「一指」を「一瞬のうちに悟らせる」という意味で理解することもできるであろう。

懐悦は「書詩家一指後」の中で次のようにいつている。

「禪家には一指の伝えがあるが、指に意義があるのではなく、心に迷いが無いことを明らかにするものであろう。

詩家にも一指の喩えがあるが、詩法の伝えるところは正宗を元とし、心の修養につとめることを貴ぶのである。」(注五参照)

『一指』に深く感銘を受け、それを編集し出版した懐悦も「一指」という言葉を禪宗の悟りとして理解していることは明らかではないだろうか。そして「一指」を「悟らせる」つまり真実、真諦を分からせるという意味で理解してこそ初めて、「集之一指」の後の「真」と「非真」を説く文章の意味も理解することができるだろう。即ち真人にして初めて詩の真を知り、詩の真を知った上で、「一指」の「非真」——明示されたものとしての有限性を知るが、「非真」の真——有限性の真実性もまた「一指」に備わっているとう意味であろう。

#### 五三三 「集」——「詩法論集」

上文のように「一指」を書名としてだけでなく「真諦を悟らせる」という意味で理解するとすれば、果して虞集が自分の作品をここまで称賛することが可能であろうか。「集」を「虞集」として解釈する必然性はあるだろうか。そこで筆者は「集」を「詩法論集」として解釈することを試みたい。四一三では狭義の『詩家一指』の編集者を「二十四品」等の著者と区別すべきであることは既に論じたが、ここでは「集之一指」のあとに「三造」「十科」「四則」「二十四品」それぞれの効用を説明するのだから、「集」はそれら形式、内容とも様々に異なる文章の集まりを指すと理解したい。<sup>16)</sup>

もしも『詩法論集』の説が成立すれば、仮に虞集本が本物であるとしても虞集は編集者であり、彼の作といえる部

分は「三造」「道統」（他の版本の総論と「外篇」部分）及び他のどの版本にも存在しない「詩遇」であるが、『二十四品』ではないと考えられる。よって、虞集が『二十四品』の著者である説は否定されるのである。最後に一つ指摘しておきたい。張氏は「一指」を書名として解釈しているが、『虞侍書詩法』または『新編名賢詩法』に基づいて論を立てる以上、『一指』と言う書名はどこからも出てこないのではないかということである。

## 六 結論

以上朝鮮本『詩家一指』と『木天禁語』に基づき、『学范』の「一指」問題を解決することによって、『二十四品』に対する懐悦著者説を完全に否定することができた。また「摠論」を分析することによって、狭義の『詩家一指』は「詩法論集」であると推測し、その編集者及び編集された時代が元代、収録されたものは元代以前の可能性があるという結論に至った。更に「集之一指」を禅宗思想に基づいて解釈することによって虞集著者説に疑問を呈した。『二十四品』或は『二十四詩品』の著者について現在筆者は具体的な名を挙げる事ができないが、成書年代は元代以前ではないのかと述べて本論の結びとしたい。

### 一 覧表

凡例：

順序、内容は懐悦本に基づく。

○：一致    ×：無    ?：不祥    △：異同有り    ……：省略

『学范』は「一指」から引用されている部分のみ記する。

版本

朝鮮本

朝鮮本

楊成本

史潛本

学范











外剝格  
前散格  
後散格

五言長篇古詩之法  
七言長篇古風之法  
五言短古篇法  
七言短古篇法  
樂府篇法  
句法

上三下四  
上四下三  
上應下呼

○ ○ ○ × × 問答 ○ ○ ○ ○ ○ × × × × × × × × × × ○ ○ ○

當對  
問答  
句法

樂府篇法  
七言短篇古法

順流而下  
○ ○ ○

○ ○ ○

○ ○ ○ 同左 同左 同左 ○ ○ ○ 五言長古篇法 七言長古篇法 × × × × × × × × × × ○ 二字貫穿在內 ○ ○ ○

○ ○ ○ 同左 同左 同左 ○ ○ ○ 酬謝體 弔挽體 謁見體 寄友體 送贈體 詠題古跡體 詠物體 雜詠八體 × × × ×

○ ○ ○ 同左 同左 △樂府 △同左 ○ △ △ △

『二十四詩品』の著者と成書年代に関する考察

上呼下應  
 行雲流水  
 顛倒錯紆  
 語倒理順  
 議論句  
 兩句成一句  
 字法  
 一副當  
 音節  
 凡例  
 起句  
 結句  
 家數  
 氣象  
 絕句篇法  
 首句起  
 次句起  
 第三句起  
 扇對  
 閑對  
 順去

× ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ △ ○ ○ × ○ ○ ○ ○ ○ ○

藏詠 ○ 間對 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ 直書句 ○ ○ 顛倒錯乱 ○ ○

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ × ○ ○ × ○ ○ ○ ○ ○ ○

藏詠 ○ 間對 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ 氣象：已上並一指 △ ○ ○ ○ ○ ○ × △ △ 直出句 △ ○ 顛倒錯乱 ○ ○

藏詠  
借喻

巖滄浪先生詩法  
詩體  
以人論家數  
體製名目  
用韻  
總論

× × × × × × × × ○ ○ ○ ○ ○ × × × × ○ ○ × ×

× × × × × × × × ○ × × ○ ○ ○ × × × × ○ × 中斷別意  
四句不聯

○ ○ ○ ○ ○ × ○ ○ 詩法卷之三 × × × ○ ○ ○ ○ ○  
名公雅論  
揭應奉云  
虞待制云  
李仲元御史云  
馬仲常云  
范應奉云  
楊編脩云  
楊載仲弘『詩法家數』

× × × × × × × × × × × × × × 因襲轉換法 陳濟蒼浦贅辭 紫陽先生評詩曰 ○ × 四句并聯 中分別意

○ ○ ○ 同左



## 参考文献

陳尚君、汪涌豪「司空圖『二十四詩品』辨偽」、《中國古籍研究》一九九六年第一期、三九～七三

陳尚君、汪涌豪「『二十四詩品』不是司空圖所作」『尋根』一九九六年第四期、四七～四八（これは右文「辨偽」の要約である）

張健「『詩家一指』の產生時代与作者——兼論『二十四詩品』作者問題」『北京大學學報』（哲學社會科學版）一九九五年九月第五期、三四～四四

汪涌豪「論『二十四詩品』与司空圖詩論異趣」『復旦大學學報』（社會科學版）一九九六年三月第二期、三八～四四

汪泓「司空圖『二十四詩品』真偽辨綜述」『復旦大學學報』（社會科學版）一九九六年三月第二期、三三～三七

祖保泉、陶礼天「『詩家一指』与『二十四詩品』作者問題」、《安徽師大學報》（哲學社會科學版）一九九六年二月第一期、八九～九七

張柏青「從『二十四詩品』用韻看它的作者」、《安徽師大學報》（哲學社會科學版）一九九六年十一月第四期、四三八～四四二

祖保泉「『二十四詩品』是明人懷悅所作嗎？」『安徽師大學報』（哲學社會科學版）一九九七年二月第一期、七六～七八

祖保泉「再論『二十四詩品』作者問題」『江淮論壇』一九九七年第一期、八六～九四

『雅倫』明順治乙未年（一六五五）費經虞自序、清康熙辛亥（一六七二）費密補序、康熙庚寅（一七一〇）王棖校刊序  
朝鮮本、宋魏慶之『詩人玉屑』正統四年（一四三九）（內閣文庫）

胡震亨『唐音癸簽』康熙戊戌（一七一八）刊（內閣文庫）

## 版本

朝鮮本、懷悅編集『詩家一指』一卷 嘉靖辛亥（一五五二）附懷悅跋 魏驥、尹春年序（國立國會圖書館）

×	×	×			
	×	×	×		
				詩學禁齋范德機	×
				詩法卷之五	×
			沙中金集		×

朝鮮本、『木天禁語』嘉靖三十四年（一五五五）刊、附『詩法源流』、尹春年跋（国立国会図書館）  
 史潜編『新編名賢詩法』前進士河東鹽運使金壇史潜校刊（年代不詳）三卷（北京図書館）  
 楊成編『詩法』五卷、附『詩法源流』三卷、王用章編、明嘉靖二十九年（一五四三）跋刊、（内閣文庫）  
 趙搆謙編『学范』二卷、明末刊（内閣文庫）  
 懷悅編集『詩法源流』一卷、明刊（国立国会図書館）

## 注

（一）蘇軾『書黃子思詩集後』（『経進東坡文集事略』卷六十）の中に次の論述がある。唐末司空図埵幅兵乱之間、而詩文高雅、猶有承平之遺風。其論詩曰、梅止於酸、鹽止於鹹、飲食不可無鹽梅、而其美常在鹹酸之外。蓋自列其詩之有得於文字之表者二十四韻、恨當時不識其妙、予三復其言而悲之。

『二十四詩品』を司空図と結び付けて語る人は殆ど上の論述、特に下線部分の「文字で表わした二十四韻を自ら並べて」という論述を根拠にしてきたが、陳氏汪氏は蘇軾がいった「二十四韻」とは『二十四詩品』のことではなく、『與李生論詩書』の中で司空図が自ら挙げた二十四聯の詩作であると論じている。後に紹介するが祖保泉がこの説に対して反論する。

（二）『明史』には「魏驥、字仲房、蕭山人。永樂中、以進士副榜授松江訓導。景泰元年、年七十七、致仕。」（列傳四十六・魏驥）「成化七年、御史梁昉言：『驥生平学行醇篤、心術正大：致仕二十餘年、年九十八歲。』」（同上、魯穆・耿九疇）とあるので、其の生卒年代は二三七三年―一四七一年と推定する。

（三）魏驥『詩家一指序』（朝鮮本『詩家一指』より）  
 余嘗退自天官、歸老於家、遂得放情丘壑、日與山林猿鳥麋鹿相接、深有烟霞泉石之趣。時或發于性情、形諸吟詠、幅巾藜杖登臨深、或憩於清風明月之下、怡然自得、而不知世之功名富貴為何事也。一日嘉禾懷氏用和、號鉄松者、以書抵余、自言近得詩法一編、乃盛唐諸賢之作、擇其精粹、訂為詩格、名之曰詩家一指。欲繡諸梓、以便四方学者乞文以弁其首。余惟、詩自虞廷廣歌、實三百篇之權輿也。下逮漢唐、則五言、七言、古風、排律、長短、歌什、春容浩澗、膾炙人口。諸家之体、可謂備矣。今鉄松懷均好之嗜之而能樂之、如五穀之美、盖有得於詩之一指者歟。夫一指者、一貫之唯、

而復以告門人之忠恕者也。其賢乎哉。後之來者尚當有感於鉄松之用意云。

成化二年龍集丙戌八月上澣資善大夫南京吏部尚書致仕蕭山魏驥序。

(4) 清康熙二十四年(一六八五)序刊「嘉興臬志」により、「懷悅、永樂通判」(六・明経)、「著作『鉄松集』」(九・書籍)。

(5) 懷悅「書詩家一指後」(朝鮮本「詩家一指」より)

禪家有一指之傳、非取義於指也、蓋以明夫心之無二也。詩家有一指之喻、亦以詩法之傳本乎正宗而貴乎心法之好也。善哉喻乎。余生酷好吟詠、然學而未能。江湖間每遇善詩者、輒叩其心法、舉不可得。一旦偶獲是編、其法以唐律之精粹者采其關鍵以立則焉。若曰雙拋、單拋、內剝、外剝、鉤銷連環、一字貫穿之類、深有得乎詩格之体、足可爲學吟者之矩度。自是日閱數四稍覺有進。今不敢匿、命工繡梓、與四方學者共之。庶亦吟社中之一助耳。有志於學者幸毋忽焉。成化二年歲次丙戌九月既望嘉禾懷氏謹識。

(清阮元文選樓刻「天一閣書目」に掲載されているのは下線部分)

(6) 「養安院藏書」：「…その印は主として初代正琳の藏書に對して捺されたものと考へらる。…この初代養安院藏書の根幹を形成するものは、言ふまでもなく朝鮮本であり、唐本もあるがこれには朝鮮に傳つてゐた分も含まれ、これらの書籍は秀吉或は字喜多秀家より贈られたもので、…医学書並びにその關係書が多く、史書類に乏しいもののやうである。」(『朝鮮學報』第一輯、朝鮮學會編集兼發行、昭和二十六年五月二〇日)

「鶯軒文庫」：「元東京帝國大學教授、醫學者・土肥慶藏(一八六六―一九三二)旧藏の日本人の主として漢詩文集、七八三八冊。当初三井家に収められたが、昭和に入つてから選択し、上野図書館が購入した。未納の分は、カリフォルニア大學へ収められた。」(『全國図書館案内上』書誌研究懇話會編、一九八一年三月一日第一版第三刷發行)

(7) 尹春年(一五一四―一五六七)、朝鮮の文臣。字は彦文、号は学音・滄洲、本貫は坡平。史曹正郎・掌憲等を歴任し、一五五三年に大司憲に昇進し、一五五五年に副提学、翌年に大司憲を経て、一五五八年には冬至兼奏請使として明國に渡つたのち、資憲大夫となつた。音律に才があつた。(新丘文化社一九六七年三月出版『韓國人名大事典』参照、吉田光男訳)。

(8) 筆者は嘉靖十九年の高儒『百川書志』を見たことがないが、清葉德輝編『觀古堂書叢刻』にある「百川書志卷」十八を調べた結果、張氏の引用と一致する。



(9) 一般に朝鮮で刊行された書物の特色について次の論述がある。

「外国で印刷された書物では、高麗本が最もよい。：およそ中国で印刷された書物は、これまでのところ、どれも字句の脱落や章数の不完全な者などであったが、高麗本にはついに完全な善本がうまれている。「外国所刻之書、高麗本最好。：凡中夏所刻、向皆字句脱落、章数不全者、而高麗竟有完全善本。」陳国慶『漢籍版本入門』、沢谷昭次訳、研文出版社一九八四年初版第一刷。一九九二年初版第三刷。

「朝鮮には善本が多いと称せられてきた。朝鮮本には、特に高麗や李朝初期刊本には、宋・元版を藍本とするものが多く、これが後世迄踏襲されて、所謂系統のよい書が多い。」藤本幸夫『朝鮮本の訂正に就いて』——『重修政和經史証類備用本草』を中心にして——『朝鮮文化研究』第一号、一九九四年東京大学文学部朝鮮文化研究室研究紀要

(10) 余嘗見本朝人趙謙所著學范中有木天禁語之目、及忝在玉堂、啓購于燕京而得之。今為芸閣提調、思欲廣布、與學詩者共之。白于上提調、大提學鄭公士龍而印之、且詩法源流亦學詩之要法、故並附印焉。嗚呼、文章小技也、然苟不妙悟則終不能入於堂室矣。妙悟之方、盡在此書。若其能悟與否則在學詩者用力之如何而已、余何言哉。  
嘉靖乙卯四月日坡平尹春年謹識

(11) 「永樂二年」(一四〇四)、即ち王惠本が刊行された年の方が正確ではないかと思われる。

(12) 此段文字見于『詩家一指』之「十科」中第一科「意」、由此可知、此処「一指」即是『詩家一指』。据此可以斷言、「一指」一書、至遲在洪武二十二年以前就已有了。

(13) 楊成「詩法」の『詩法家數』と校刊したが、この部分が見付かっていない。しかし、懷悅『詩家一指』の「家數」にある。張健がいった『詩法家數』は未祥である。

(14) 『學范』引用『一指』尚有兩所、不見于『詩家一指』、而見于『木天禁語』与『詩法家數』、这表明『一指』与上二書在流傳過程中有交叉、限于篇幅、本文不能展開討論、俟另文專論。

(15) この八条はそれぞれ楊成本卷一『木天禁語』、史潛本下卷『木天集語』(「集」は「禁」の誤植であると思われる)及び後程述べる朝鮮本『木天禁語』の中から見出すことができる。

(16) 「真偽辨總述」によれば香港大学の陳勝長は次のように指摘している。  
『二十四品』下有題注云：「中篇秘本謂之發思篇」、可知作者嘗見一種內容与『二十四品』相同的『中篇秘本』、名為

「發思篇」、假使此話可信、那末『二十四品』仍襲取他書而書、非『一指』作者所自作。

表題『二十四品』の下に「中篇秘本ではこれを發思篇と稱する」という題注があることから見て、作者が曾て『二十四品』と同じ内容の『中篇秘本』、表題は「發思篇」というものを見たことがある。もしこの話が本当であれば、『二十四品』も別のところから受け継いだものであり、『一指』の著者の自作ではない。

陳勝長の指摘も筆者の推測を裏付けるものではないかと思われる。

#### 補注

筆者は一九九七年一〇月二七日日本論文を完成した後、『中国詩学』第五輯（南京大学出版社、一九九七年七月）を入手した。ここでは「『二十四詩品』真偽問題討論」という特集が生まれ、今回の論争に関する新たな論文が多数発表されている。中には本論主題と深く関わるものもあるが、時間と紙面の制約上今回は考察を加えることができない。今後稿を改めて細かく検討することにした。